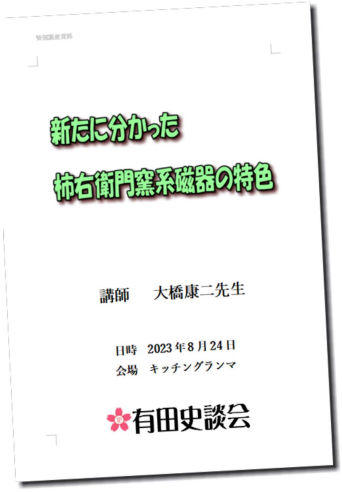
会報

有田史談会
事務局
佐賀県西松浦郡有田町上幸平 1-8-5
TEL　090-4740-4752
HP　arita-sidankai.sub.jp/
arita-sidankai@hotmail.com

四年越しの講座が開催！

２０１９年１月に開催した講座を最後に、大橋先生の講座はコロナ禍で休止になってきたが、コロナ感染の終息を期待しながらも感染は止まらず、通常の例会さえも開くことが出来ないまま４年が経った。

昨年５月連休明けからコロナの感染拡大もようやく落ち着き、コロナの５類移行後の８月に昼食会を兼ねての特別講座をキッチングランマにて実に４年半ぶりに開催することが出来た。



久し振りの大橋先生との再会に歓談が弾み、昼食後も海外での講演活動などお聞きすることも出来て和やかに楽しい時間を過ごすことが出来た。

特別講座は「新たに分かった柿右衛門窯系磁器の特徴」の演題でご講演頂き、講演後の質疑応答にも時間を割いてもらい充実した一日になった。

講演では、典型的柿右衛門と広義の柿右衛門の違いが「広義の柿右衛門では染付が施されていて素地が濁し手ではない」と解説されあらためて良い学習機会となった。

１６５０年代に柿右衛門窯で造られた六角板造りの壺がイギリスのハンプトン・コート宮殿に現存することから、イギリスの名誉革命（1689）で女王になったメアリー２世が有田の焼き物に魅せられ特別に発注したことが推測されること、また当時収集された角瓶のほとんどがドイツ・ドレスデンの宮殿に収まっていることから後にアウグスト強王が収集したことが理解できた。

中でも、明暦の大火（一六五七）で焼失した江戸城から祥瑞手の色絵が出土し、山辺田で出土した色絵に酷似していて初期の色絵が有田で作られていたこと、典型的柿右衛門中皿は国内では東京と徳島に一例ずつあるだけで欧州輸出中心だったことや１６７７年に完成した西本願寺経蔵の壁には有田焼の腰瓦が貼られていることなど興味深い解説もあった。

さらには、元禄１２年（一六九九）の土型に年木山酒井田柿右衛門銘があり最初に「年木山」使用した例と考えられ、伝世品が英国で発見されていることなど新しい柿右衛門窯の特徴が明らかになった。

また染付生地を使用した陶片が柿右衛門窯より出土しており、広義の柿右衛門様式の作品も作られていたことが解った。典型的柿右衛門と広義の柿右衛門の違いが素地の違いだけでなく、幅広い観点からより判り易く解説があり、内容の深い講座となった。

キッチングランマでの講座開催

2023年度「活動実績」

4月	史談会通信第36号発行
5月	史談会通信第37号発行
6月	史談会通信第38号発行
7月	史談会通信第39号発行 会報7月15日号発行
8月	史談会通信第40号発行 大橋先生の特別講座
9月	史談会通信第41号発行
10月	史談会通信第42号発行 三川内古窯跡見学
11月	史談会通信第43号発行 生涯学習センター例会
12月	史談会通信第44号発行 三川内古窯跡見学
1月	史談会通信第45号発行 会報1月20日号発行
2月	史談会通信第46号予定
3月	史談会通信第47号予定 有田史談会総会予定

※1～3月は変更もあります。
年度末まであとわずかですが、会員皆様今後ともよろしくお願いいたします。

第２回巴里万国博覧会

坂井　勝也

月に２回程度、れきみん応援団の一員として、旧田代家西洋館の担当をさせて頂いております。コロナ禍以降、来館者は減りましたが、インターネットなどで調べ目的を持って来館されている方が増えているように感じます。来館されるお客様と楽しい会話をする機会もあり、楽しみながら勤めております。そこで、１８６７年の第二回パリ万国博覧会に田代家のやきものが出品されたことをいつも話しております。

第二回パリ万国博覧会は日本の国が万国博覧会に参加した嚆矢であり、佐賀県、有田にとっても、これ以降、１８７３年ウイーン、１８７６年フィラデルフィア、１８７８年パリ、１８９３年シカゴ、１９００年のパリ万国博覧会まで黄金期を築きました。「肥前陶磁史考」には次のように記しております。

巴理博覧会と佐賀藩

慶應三年（一八六七）佛國巴理に於いて、世界大博覧會開催せらるるや、我邦に對し、始めて出品の勧誘を促かして來た。依って徳川幕府は各藩に傳達して、其賛同を求めしが、何れも幕末藩内の動揺と、多年の鎖國思想もありて、これに出品し得る余裕なく、僅かに應じたるは、佐嘉賀藩と薩摩藩のみであった。佐嘉藩に於ては、豫て國産の海外輸出を企圖しつつありしを以て、こよなき好機として、直ちに賛意を表し、藩主閑叟は前年（慶應二年）１２月有田皿山代官に其意を通告して、出品陶器の蒐集を命じたのである。

西光寺の陳列

石橋代官は、直ちに有田の窯焼及商人へ傳達し、當時所持せし製品見本を、上幸平の西光寺に陳列せしめ、宗藩より佐野常民等出張調査の上、適意の品を選択して、買上げたる高は一万両であった。此荷造場には、附近の民家數軒を借受け、數千里の海路を運搬する荷物とて、嚴重にも二重箱に詰込み、其他肥前國産の白蝋、和紙、麻等と共に、長崎寄港の和蘭軍艦に搭載し、一行も亦之に便乘したのである。

ＮＨＫ大河ドラマ「渋沢栄一」でも、１８６７年の第二回巴里万国博覧会出品会場の件で薩摩藩と徳川幕府と争う場面がありましたが、佐賀藩（鍋島）の参加については一言もふれていませんでしたので、「佐賀藩の参加に触れなかったＮＨＫはけしからん！」と言って、来館のお客様と一緒に笑いながら終わります。

１８６７年の第二回巴里万国博覧会参加は、日本の長い鎖国から目覚め、目まぐるしい西欧文明に触れ、日本の国際化に進むきっかけになった大きな事件だと理解しています。

第２回パリ万国博覧会の会場

六十年に一度巡ってくる甲辰

井手　邦男

私の地元にある豊姫神社で十五年間神社総代を務めています。神社総代の役割は神社の仕来りによっていろいろありますが、正月は元旦祭の準備をして神殿にお供え物をしています。

今年も朝十時から元旦祭が始まり、九時半くらいには地元の参拝者が集まりかけます。地元以外からも参拝者が数名いらっしゃいましたので、神社の中に入ってもらい参拝をしてもらい、十時からの神事にも一緒に参加を促しました。

神事を行った後、宮司さんから挨拶がありました。今年は辰年でありますが、干支の辰年は厳密には甲（きのえ）辰（たつ）です。といった話をされました。干支には六十干支があり甲辰は大変めでたい年であると聞きました。

終盤にはお屠蘇と豊姫神社の絵柄が入った瓦煎餅をいただいて参拝を終えて年の初めを迎えました。

辰年に因んで思うことを私なりにまとめてみました。

【六十干支を理解する】

「甲（きのえ）」は、「十干（じっかん）」の一番目の文字で、物事のはじまりを象徴し、「辰」は万物が成長して動きが盛んになる象徴とされているそうです。十干も十二支も、中国で暦や時間を表すために使われ「十干」は「甲・乙・丙」など、一から十までを数えるための呼び名で、「十二支」は年ごとに当てはめた十二種類

の動物の呼び名で「**干支**かんし」は**十干**と**十二支**を順に組み合わせて年を呼んだものだそうです。　その組み合わせは六十通り、自分が生まれた年の干支に還るのは六十一年目になります。　このことが満年齢六十歳で還暦を祝う由来とされていることを知りました。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
甲子	乙丑	丙寅	丁卯	戊辰	己巳	庚午	辛未	壬申	癸酉	甲戌	乙亥
13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
丙子	丁丑	戊寅	己卯	庚辰	辛巳	壬午	癸未	甲申	乙酉	丙戌	丁亥
25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
戊子	己丑	庚寅	辛卯	壬辰	癸巳	甲午	乙未	丙申	丁酉	戊戌	己亥
37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48
庚子	辛丑	壬寅	癸卯	甲辰	乙巳	丙午	丁未	戊申	己酉	庚戌	辛亥
49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
壬子	癸丑	甲寅	乙卯	丙辰	丁巳	戊午	己未	庚申	辛酉	壬戌	癸亥

【日本で十二支の由来とされる昔話】

干支かんしにまつわる昔話として、いつ誰から聞いたのか忘れてしまいましたが面白おかしく記憶している話があります。

昔、神様が「一月一日の朝、新年の挨拶に神様のところに来た一から十二番までの順に一年交代で動物の大将にする」といったお触れを出したそうです。

動物達は、張り切って神様のところを目指し牛は足が遅いから前日の夕方に出発。一番に到着したかと思った矢先に、牛の背中からネズミが飛び降りて、ネズミが一番を獲得。道中ずっとケンカをしていた犬と猿。イノシシは本当は一番に到着していたのに猪突猛進過ぎて神様のところを通り過ぎ、結局十二番になってしまった。猫はネズミに「神様のところに挨拶に行くのは一月二日と嘘をつかれ、十二支になれなかったなど。

しかし干支の中には動物ではない竜といった空想の生き物が入っていること自体、中国の影響が色濃く出ているのだなあと思うところがあります。

【辰・龍・竜の違いは？】

昨年末に年賀状を作成しながら「辰・龍・竜」にどんな違いがあるのか？と思う節がありはしましたが、絵柄に惹かれて選んだ際に定形で書かれた「辰」を選び年賀状作成しました。

「2022・違い比較辞典」で「竜」と「龍」と「辰」の違いを調べてみると、「竜」も「龍」も、いわゆる「ドラゴン」を指し、意味に違いはない。旧字体である「龍」を簡略化したものが「竜」である。「辰」という字には元来「竜/龍」の意味は含まれず、あくまで「十二支」におけるシンボルとして「竜/龍」が割り当てられている、と記されていました。

【竜の爪】

竜に関しては、中国や台湾へ旅行をした際に王宮である故宮などに描かれているものを見たことで個人的に興味をもっています。特に注視しているのは竜の爪です。

中国の明の時代に皇帝の象徴である竜は５つの足の爪。３つ爪は下級官吏や一般大衆に愛用された。皇帝を除いたいかなる人物でも、完全に金色な５つ爪の竜を利用するのは死罪であった。と中国の現地ガイドから説明を聞きました。それからは竜の絵を見る際は竜の爪を確認するようになり、竜の爪について調べてみると貴族や高級官吏へ向けられた竜は４つの爪で描かれていることが分かりました。

４つの爪を描いた龍

【自分自身を支える年始の目標】

私は今年の３月で喜寿と言われる長寿を祝う節目年齢を迎えることになります。これも中国から伝来した思想で、紫が長寿祝いの色とされていますが、親しい友人と食事会をして過ごす予定にしています。

年の初めから地震・火災・などなど地球各地で自然災害や事故・紛争などが発生しています。２０２４年の甲辰年は特有のエネルギーを持つ年とされており、学習意欲が高まり、創造的で美的な分野に新たな好奇心や情熱が芽生え、自己への自信も増し、活気にあふれたダイナミックな

年になると言われているようです。
健康面や日常での生活を気遣いながら、好きな神社巡りや焼き物に通じる歴史を探索したり、担っている役割を無理なく遂行し次の傘寿を目標にしたいと思います。

肥前のやきものの魅力３

山口 信行

中期（延宝・元禄期）伊万里の魅力

九陶によれば、江戸期を通して最も優美なやきものが焼かれていた時期が江戸の延宝期（1673年～）であると云われている。柴田夫妻コレクション等を観れば分かるが、この時期製造の地肌は白く、その描画は繊細、丁寧で余白を取り、周囲に塗られた錆釉で器体がよく引き締まり、魅力が一層際立っているように思える。色絵で云えば、濁し手の柿右衛門様式が見られた時期でもあり、云わば磁器の日本的な美が完成された時期でもあるようだ。

別名、この時期の伊万里を『盛期伊万里』と云われたりもしている。日本的な美を意識した商品が製造されることはこれ以降あまりないようにも思え、まさに、“江戸期を通して最も優美なやきもの”という形容は、充分納得出来るように思われる。

それに続く主要時期が元禄期（1688年～）である。京や大阪の豪商が文化の担い手であるような、云わば「元禄文化」華やかな時期の、贅を尽くしたやきものが焼かれたりしたようだ。上手の金襴手様式を「型物」と呼ばれているものなどもこの中に入る。豪商と云われる商人たちの特注に応えた、一般の人が手にすることはまれな豪華絢爛なやきものだったようである。だが、延宝期に見られるような余白を活かした描画は段々と影をひそめ、ぎっしりと描き込んだ器に特徴があるようだ。もちろん、この時期においても海外への輸出は継続し、十七世紀から続いたその海外輸出は十八世紀の半ばまでの一世紀の間続き、その後は国内向け生産へと向きを変えていくこととなる。

中期（享保期）伊万里の魅力

元禄期に続く時代は享保期（1716～）であり、二十年間ほど続く。例年献上で将軍に送られていた多色の色鍋島の制限に見られるように、８代将軍吉宗による「倹約令」の影響のためか、この時期の色絵は民窯の有田においても影響を及ぼしているように思われる。何となく多色化が減少しているように感じられる。けれども、それでも逆にその簡素化、単純化がこの時期の一つの特徴を残しているようにも思われ、興味深く、また私には好ましくも感じられる。

以上、有田焼初期の十七世紀初めより、約一世紀間の十八世紀初めまでの流れを見てきたが、その後は十九世紀の半ば過ぎまで、江戸期の有田焼は続いて行くこととなるが、個人的には誕生から１００年間位が特に好きで、興味をもっているところである。

ところで、ここでどうしても忘れてならないのは、前に述べた寛文期

の有田焼であるが、その色絵が，初期の色絵，であり、かつて、云わゆる「古九谷」と呼ばれて来た肥前のやきもの類である。これについてのその魅力については、次回以降に触れてみたいと思う。

有田の金山と隠密と家康

鶴一樹

有田歴史民俗資料館で販売されている「皿山なぜなぜ」という解り易い有田焼入門の本がある。この中に有田で「金」もとれたの？という問いに答えた文章から、こうだったんじゃないかと想像を巡らせた。

「皿山なぜなぜ」から。

一六二三年、有田古木場地区に金掘り人夫、山師その道のプロ集団がやってきた。

一六二四年、調査完了、掘り始めた翌年三月ズバリ金鉱脈を掘り当てた。一六二五年、四月から翌年十月までに金百八匁産出。

一六二七年、十月までに金一貫五二三匁、銀十三貫八四五匁を産出したが、一六二九年末に廃坑、金掘り集団去って行った。（掘り尽くした）

一時5千～六千人が住んでいて、人家が五百～六百軒、商家も三十軒あったらしい。これだけ人がいると生活のため食べもの屋、魚屋、米屋、古着屋、道具屋、八百屋があって盛り場もあった。酒場、賭博場、遊郭がアメリカの西部劇の映画で見るような日本版だ。そして、突然鉱山師、山師、穴掘り人夫がいなくなった。

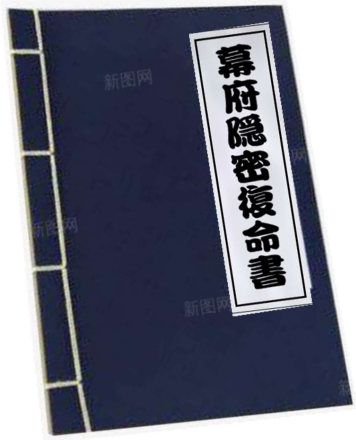
ほとんど去って行ったが借金があったり行くあてのない人々で何千人か残っていた。（一六二七年幕府隠密が調査報告している）この残っていた人々は食っていく為、細々と金を探しあちこち掘り回っていただろう。そして戸矢の方から中樽泉山の方へと移動していった。南原地域でも陶器から少し磁器も出来て、もっと白磁土さえあればいい磁器が焼けるのになあと、十数年前に多久から来ている李参平さんがいて、彼は金山くずれの人たちの中の優れた山師を見つけて探させ見事に泉山磁石場を掘り当てたんじゃなかろうか。

金山くずれの人夫たちも働き口ができて喜んでいたが、山本神右ェ門は一六三七年に八二六人を追放（リストラ）し、磁器作りを確立した。

「どうする家康」は終ったが、どうした家康！　家康は秀吉にはグウの音もあがらぬ程、頭を押さえつけられた。金の力で「ゴールド」で。

秀吉が死ぬと、もう誰も家康の「ゴールドきちがい」は止められない。征夷大将軍になると「天下の鉱山は全て自分のものであり、鉱山を発見した山師はその場所がたとえ城の下であろうと掘ってよい」とお達しを出した。それで、忍者、山師、隠密、日本全国どこを掘っても良いとお墨付きをもらった。江戸から遠く離れた有田にも何らかの情報があって掘りにきた。掘り尽すとあっさり他に移動。藩主勝茂も許可している。

一方の見方で、上杉の佐渡金山を奪うため関ヶ原の戦いをやり、豊臣の莫大な黄金をすべて奪うため冬の陣・夏の陣をやった。そして、満足して（？）死んだ。隠密という情報機関を持つことはイギリス人のブレーンから聞いたようだ。



椎谷神社考

前田　順三

江戸時代の古地図で、安政六年（一八五九）の古地図以前に作成されたものに、「慶長肥前国絵図」、「正保絵図」、「伊能図」、「天保国絵図」等があるが、江戸時代の新村（後の有田村、東有田町）の中のどの地図にも唯一「外尾村」の地名だけは記載がある。そのことから、外尾村は江戸期には新村の中心であったと考えられる。

その外尾村、現在の外尾町にある

のが椎谷神社である。椎谷神社は旧村社であり、祭神はイザナギノミコト、イザナミノミコト、アメノホヒノミコトの三神である。創始については慶安二年（一六四九）、慶安三年（一六五〇）、慶安四年（一六五一）と三説あり、一番古い慶安二年（一六四九）説は、有田歴史民俗資料館に保管してある「明治三九年社寺ニ関スル書類　神社佛堂ノ由緒及舊跡ニ関スル書類」の中の「村社椎谷神社事蹟」によるものである。

椎谷神社境内に設置してある由緒書には慶安三年（一六五〇）と記してあり、昭和六十年（一九八五）有田町発行の有田町史（政治・社会編Ⅰ）、あるいは大正十五年（一九二六）十一月「佐賀縣神職會」発行の「佐賀県神社辞典」によれば創建は慶安四（一六五一）年と記載してある。

因みに現在の有田町の崇廟とされている陶山神社の創建は万治元年（一六五八）八月十五日、松浦郡大里村（現在伊万里市）の蓮華石正八幡宮より勧請されたといわれているので、いずれにしても椎谷神社の創建は陶山神社より古いということになる。

由緒については三説ともほぼ同一であり、当初、三神を木造を以て合祀していたが、貞享五年（一六八八）九月に木造に替えて三体の神鏡を奉鎮した。ところが文政四年（一八二一）頃、賊に盗まれてしまった。捜索したが見つからず止むを得ず再度木造を以て阿弥陀如来、釈迦如来、観音菩薩の三体を作りこれを奉祀した。その後約十年後の天保元年（一八三〇）頃長州下関において盗まれた三体の神鏡のうち二体が漁夫の網にかかった。

しかし神鏡の裏面に「肥前國松浦郡有田郷新村」の銘文があったので、盗賊もどこにも転売することができず、あるいは神威を畏れてついには海へ投げ入れたものと思われる。ちょうどその頃小城郡牛津町の魚類商人が仕入れの為に来合せていて、当初二体とも欲しがったが、一体は自分の所で祀り、一体は椎谷神社に奉還したという。

そして三体の木造の仏像と交換して祀られた。その交換された仏像は外尾村（現在外尾町）の善福院に安置されたとされているが現在は確認できない。牛津の商人がその後言うには、非常に家業が栄え感謝の意味で年に毎年正月と七月には椎谷神社に参詣したという。

また神鏡が網にかかり引き上げた漁夫も大漁ばかり続き大いに栄え同様に非常に幸せに暮らしたとのこと。これも御神霊の大いなる顕れであると感謝したという。

現在の外尾町の善福院に、神鏡が戻ってからの三体の仏像について伺いに行ったが、その話自体初めて聞くことであり、そのような仏像はお寺にはないとのことであったが、別のことで興味ある話が聞けた。というのは坊守さん（お寺の奥さん）（現在七十歳代前半）の話では、昔、自分たちの小さい頃は椎谷神社を「権現さん」と言っていたとのこと。調べていると他にも七十代歳代後半の女性に訊いたところやはり「権現さん」と言っていたとのこと。安政六年（一八五九）の江戸時代の地図を見ると確かに椎谷神社の所に「権現」と書かれている。「権現」とは本地垂迹説で、仏が化身して仮に神の姿で現れる（「権」に「仮に」の意あり）ことをいい、これは前述の三体の阿弥陀如来、釈迦如来、観音菩薩が奉斎されていたことから来ていると思われる。

祭神のイザナギノミコト、イザナミノミコトの両柱は周知の国造りの

神であるが、今一つのアメノホヒノミコトは、アマテラスとスサノオの誓約（うけい）の時に生まれた男神五柱の一つでアメノオシホミミノミコトの弟神とされている。漢字では「天穂日尊」とも書き、文字通り稲穂と太陽の神とされ、米作り、農耕の神として祀られたものと思われる。

参道入り口の鳥居は、非常に判別しにくくなっているが辛うじて「明治十七歳甲申（こうしん・きのえさる）」と読めた。

余談になるが、旧新村の神社鳥居で江戸期建立では、外尾山・八幡宮の「寛政四壬（一七〇二）」、桑古場・天満宮「文化巳歳（一八〇九）」があり、有田の他の神社には江戸時代の鳥居があるのに、新村で一番古いと思われる椎谷神社に江戸時代の鳥居が現存しないのは残念である。

しかし、境内にある「天照皇大神宮」には正徳二辰年（一七一二）とあり、「三十三観音」の前に立つ「地蔵菩薩台座」には明和七庚寅（一七七〇）、「月天子」には天保三年辰（一八三二）、「廿六夜塔」には嘉永二年（一八四九）等の年号を刻んだ江戸期の石造物がある。

柿右衛門に残された「びいどろ」

鶴　美百合

新年明けましておめでとうございます。二〇二四年もなんとか、よろしくお願いします。

昨年の三川内の**フィールドトリップ**では、やっとマスクなしの古窯巡りができるようになり久しぶりの新鮮な空気を満喫しました。それに歩くことにより、日頃の運動不足も解消され、おしゃべりもでき、なんだか頭も活性化したようで楽しかったですね。

私は今回の会報に向けて超、超、大作を手がけたのですが、なんという事でしょう！タイプを打って操作している途中にjjjjjjj…と永遠にPCが勝手に打ち始めたと思ったらあっ！という間に超大作が全部消えてしまったのです。今となっては後悔しても仕方がないので、スマホを使い，人差し指でポツポツ打って書いていますので、これは、簡潔に書くようにとのメッセージだったのだなと思う事にしました。

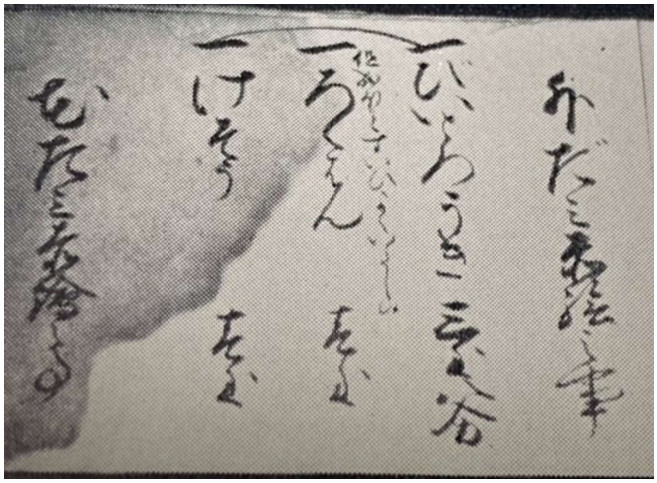
さて、今回のタイトルは**「びいどろ」**です。ご存知とは思われますが、「びいどろとは」「Vidro」ポルトガル語であります。そう、南蛮菓子「カステラ」「丸ボーロ(boro)」など、いまやもう、長崎や佐賀の名物お菓子になっていますね。一六世紀のポルトガルの貿易港から入って来た宣教師達より伝えられたと言われています。

それで、柿右衛門さんに残る旧記に「びいどろ」が出てくるのをご存知でしょうか？　私と言えば、今まで、ぼ～っとして、「びいどろ」ね、ふんふん、と言う感じで、スルーっと通りすぎておりました。

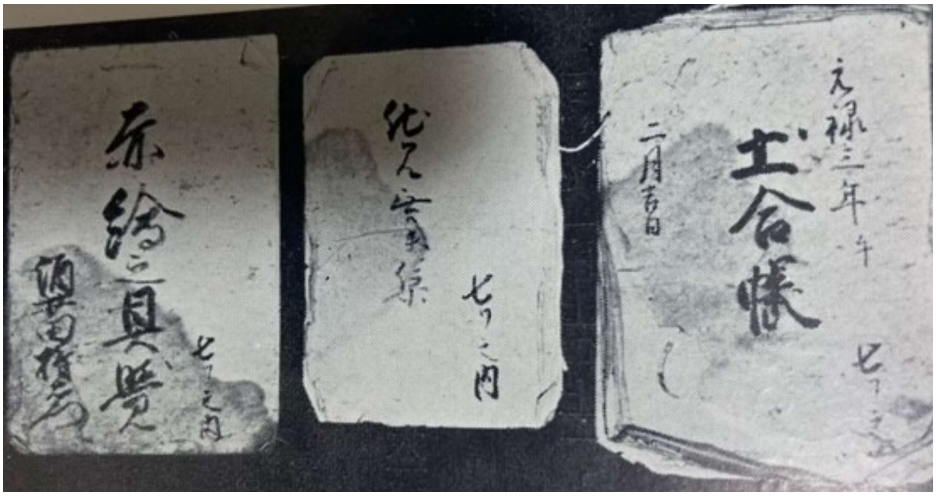
どこに「びいどろ」が出てくるかと言いますと、**「赤絵之具覚」**です。元禄三年(1690)の絵の具調合法です。まずはごらん下さい。

濃赤絵

一、びいどろ
一、ろくはん
一、けそう



「びいどろ」とは肥前地方では唐石、他地方では白玉又は「フリット」と



呼ばれる。「ろくはん」は漢字で緑礬と書き、硫酸鉄。「けそう」は「唐の土」または鉛白とも言われ昔は白粉として使われたとあります。で、この三種を色絵は調合するようで、「びいどろ」の原料は数ページに及び記されています。

また、この調合の比率は何分にもんぞやですよね？　日本にどうやって伝わったのかと調べてみると、どうやら、一五四九年にフランシスコ・ザビエルが渡来して、大名や権力者に献上され、織田信長には、金平糖をガラスの容器に入れて差し出した事がルイス・フロイスの日本史に記されています。

狩野内膳「南蛮屏風」（部分拡大図）

さらに、江戸時代になると、ポルトガルとの交易を通じてヨーロッパガラスの製法が伝わり、これまでの製法では作る事ができなかったガラスの器が日本でできるようになったとありました。

なるほど、キリシタン文化と共に「びいどろ」が紹介されたのですね。色絵には欠かせない光沢を与える原料だけに「びいどろ」は重要不可欠でしたね。

それにしても、あれあれ？　柿右衛門さんは、確か色絵の技法は伊万里の東嶋徳左衛門という者が、長崎で**しいかん**という唐人（中国人）から伝授されたと「覚」にありましたよね？　礼銀を十枚差し出したと。だとすると、中国人から教わったのだったら、「がらす」「硝子」という漢字のはずですが？はて？これいかに？

酒井田家一子相伝（他見無用）のものですので原料だけに止めるとありました。（柿右衛門の本より）

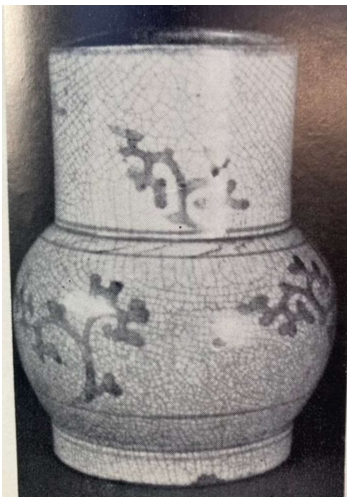
さて、改めて「びいどろ」とはなと書いたのでしょうか？

時は禁教下です。遠藤周作の「沈黙」の映画さながらの厳しい弾圧を恐れず、あえて「びいどろ」と使ったのは？　ひょとして、私達後世に、キリシタン陶工がいたのだという「暗黙のメッセージ」でしょうか？

キリシタンと有田でいえば、もう、即、豊臣秀吉の聚楽邸（1585）のお庭焼きの陶師あった高原五郎七ですね。

柿右衛門文書には元和三年（1617）博多承天寺住職、酒井田円西（初代柿右衛門）へ高原五郎七を推挙と、ありました。また、承天寺の和尚の手紙にも「器用な男で、楽焼、南京写し、また白手の陶物の細工が見事なので、貴家ご子息の相談相手になるのではないか、、」などと書かれています。

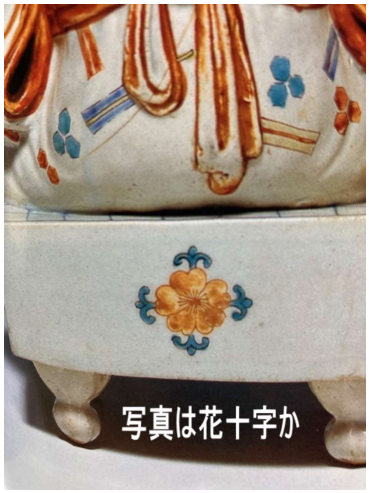
それで、「柿右衛門」（昭和三十二年発行）の本には、「赤絵と言わず、酒井田旧記「土、絵の具調合控」

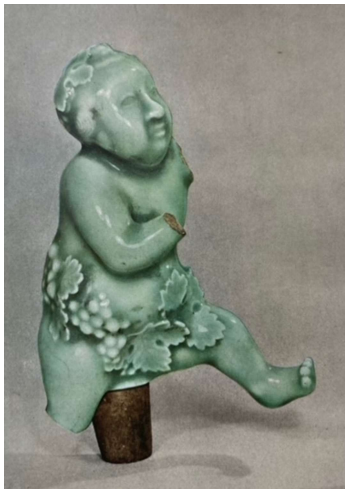


の項に「高原ごす土」の調合法が記されていまして、名称が「高原呉須土」とあるから高原五郎七と何らか関係を持つ胎土と思われるとあり、また、十二代柿右衛門は先祖の作品に染め付け貫入磁器があったと証言。

有田町の西光寺にある壺は寛永頃の百間窯か？と一見思えるが、描かれた文様、描線、だみ染が柿右衛門の作風に酷似などと書かれていますしね。

それに、現在の柿右衛門窯の古陶磁美術館に貼られてある年表にも「高原五郎七から陶技を伝授」とはっきりと記されてあります。





それどころか、五郎七の名は鍋島内庫所の文献に「寛永五年福田喜左エ門日清は鍋島藩御用陶器方主任として、岩谷川内に来る。後大阪浪人高原五郎七より青磁焼造の技法を習得する」とかもあり、これなんかもう信憑性ありありの気がします。

また、この青磁五郎七の南川原滞在は藩窯の青磁に先行するものと見られ、遺存する唐子像、透し彫り香炉を見ても前者の顔貌、容姿は勿論、西洋意匠の葡萄文は異国色強い、、（略）」とね。

などなど、キリシタン疑惑の謎の高原五郎七どころか有田の陶業に大貢献した方なのでは？と

そして、とうとう、皆様、なんと、遂に、キリシタン陶工を実証する史実を見つけたのです。　どこで？それは、史談会で昨年11月に訪れた三川内の「葭の本（よしのもと）遺跡です。なんと、西有田の原明窯跡から三百㍍の距離です。

平戸領と肥前領の境界線ではありませんか！　陶工達の交流がないはずはない！　という近さでした。柿右衛門窯の陶工達とも、三川内の陶祖の巨関とも切磋琢磨に茶陶の唐津焼きや、後には磁器と移行して陶技を磨いていた事でしょう。

そして、頂いた三川内窯業関係年表には、**慶長三年（1598）松浦鎮信朝鮮より帰陣、朝鮮人百五十二人を連れ帰る。　陶工は十人ほど**が目に留まりました。松浦鎮信と息子の久家はなんと、驚き！超有名キリシタン大名小西行長（私の大、大ファンの内藤ジョアン様も！）隊所属だったのです。

文禄の役の一五九三年十二月二十七日に秀吉の命令により朝鮮出兵を取りまとめることとなった一番隊総大将小西行長（洗礼名アウグスティン）は、なんと！秘密裏で、マドリッド生まれのスペイン人宣教師セスペデスを呼び寄せていたのです。

いやはや、私は、最初はこの史実が信じられなかったですね。この出来事は、二〇一三年に朴哲氏の「グレゴリオ・デ・セスペデスと文禄の役」を谷口智子氏（愛知県立大学日本、天草出身）が訳されて初めてわかったことで、日本の研究者には知られていないという事でした。

そこで、セスペデスは何をしたのか？と言えば、セスペデスは朝鮮出兵するキリシタン大名や武将達のためにミサを行い、告解を聞き武将達との交流していました。

で、セスペデスはどこに滞在したかと言えば、釜山近郊の熊川倭城（コムンガイ）に主に居住し、近隣の城にあるキリシタン大名や武将達の館を訪れていました。

あれ？　熊川（こむがい）と言えば、熊川茶碗で有名ですね。口のところがちょっと反った感じの茶碗だったかと？

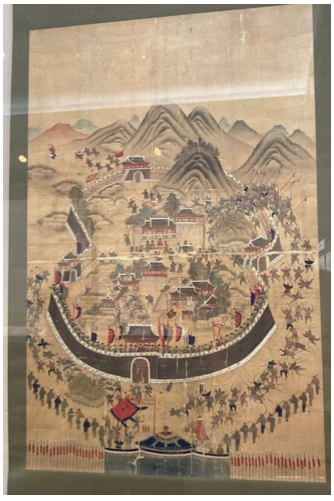
それに、三川内焼きの陶祖、巨関も高麗ばばのルーツはここ韓国・慶尚南道熊川出身です。

ところがです。大変な事となってしまいました！　キリシタン小西行長陣で布教活動を行なっていたセスペデスは、なんという事でしょうか！小西行長の政敵と言えば、ガチガチの仏教徒（日蓮宗）の加藤清正です。清正にこの布教活動を秀吉に密告されてしまったのです。そう、告げ口ですね。仲が悪いとは聞いていましたが、こんなんでしたね。

さあ大変！セスペデスは急遽帰国しなければならなくなったのです。

しかし、セスペデスは日本に帰っても、戦争に参加した日本人キリシタンと交流し、イエズス会に朝鮮半島から連れ帰ってきた朝鮮人捕虜（二千人以上）に洗礼を施し、キリシタンにしたのです。四捕虜の子供たちの一部はイエズス会の学校で信仰教育を受けました。後に日本やその他の国で布教活動し、殉教した者も。セスペデスは朝鮮人捕虜との接点があり、しかも優秀な朝鮮陶工を多く日本に連れてきたのです。

以上の事がざっとですが『グレゴリオ・デ・セスペデス－スペイン人宣教師が見た朝鮮と文禄・慶長の役』に書かれています。



そうそう、最後になりましたが高原五郎七は元和五年(1619)唐津(現在伊万里市)の椎の峯に七年間逗留していたと伝えられています。巨関の息子今村三之丞も元和五年(1619)に椎の峯に七年間陶器修行で逗留しているのですがこれは単なる偶然でしょうか？

それに、「三之丞十六歳の時有田南川原に(えっ？柿右衛門窯か？)に修行替え、この年青磁できる」と頂いた三川内の窯業関係年表にありました。

また、高麗ばばも椎の峰にお嫁入りして、ご主人が亡くなった後だったか？巨関に招かれて百二十七人の陶工たちとともに三川内に移住して長葉山を開業だそうです。

よく考えると、有田というところは、三川内と波佐(原マルチノ天正遣欧少年使節団)のキリシタン文化のサンドイッチされた所ですね。

さて、右手の人差し指でポツポツと簡潔に書くように心がけたのですが、なんだか長くなってきたようです。「びいどろ」にまつわるお話しは取り止めもなかったですね。

今回もハート繋ぎの続編を期待されていた方々にはチョット肩透かしになったかも知れませんね。お詫びと言ってはなんですが、私のお気に入りの花瓶を見つけたのでご覧くださいね❤

色絵岩牡丹文壺

では、皆様、風邪などひかぬようご自愛ください。

能登半島地震の被害に遭われた方々へ、心よりお見舞い申し上げます。暖かくしていただけるように安全にお暮らしできますようにお祈りいたします。

有田における三大災害について

大串　和夫

正月早々、能登半島でマグニチュード七クラスの地震があり、甚大な被害が出た。有田でも過去の歴史を見ると大きな災害が三回起きている。

まず一回目は、文政の大火(子(ね)年大風)である。日本災害通史では、「文政十一年(一八二八)八月九日大風雨の夜より翌十日暮れまで佐賀有田大火。家数千五百軒余焼失、焼死者多し。」有田皿山の大火を記録した記事である。この大火のことを『肥前陶磁史考』でには次のように記されている。

有田皿山全焼、而して此八月九日の有田皿山は、九つ時より北東の風吹き荒み、天は雷光閃々として射るが如く、地は震動して風位は辰巳へ廻り、豪雨中の大台風となった。斯くて屋根瓦は鴉の如く吹き飛ぶ中に、岩谷川内の窯焼山口森吉方の、素焼窯の火を拭き飛ばして大火となり、・々金比羅山を焼き越したのである。之より忽ち本町を甜め上ぼる火災の猛烈さは、豫て火馴れの町民とても如何んともせん術なく、全山阿鼻叫喚の果は、岩谷川内四十戸、白川百戸、年木谷十戸許りを残し、さしも繁華といわれし千軒の焼物町は、全くの烏有に帰し、焼け残りしは頑丈なる数軒の土蔵のみであった。猶此豪雨は、河川氾濫して洪水になりしも、當時は飛石のみにて橋梁なく、多くの假橋は悉く流失して、人々遁れ路に窮し、或は窯内に逃げて焼烟の為に窒息死せるがあり、中には高手なる深井に忍びて、漸く一命を拾ひしもありしが、不幸焼死溺死合せて五十餘人といはれてゐる。前記なる藩の統計中、焼失家千六百四十七軒の大部分は、勿論此皿山でありしに相違ない。と記されている。

有田皿山は文政の大火でほぼ焼失

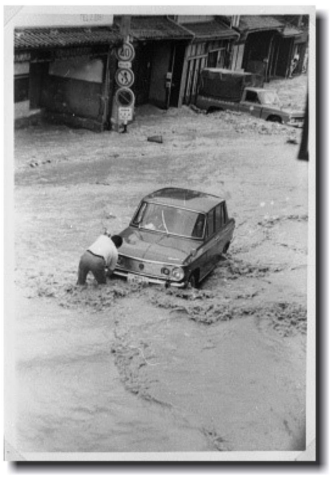
そして、有田皿山宗廟八幡宮・勧請寺も焼失した。

次に昭和二十三年九月の水害で「二十三水」ともいう。九月十一日～十二日の朝までに三百ミリを超す雨量があったと思われる。旧有田町では、がけ崩れで一名が圧死、二十三名が溺死するという惨状が発生した。この原因は猿川上流の大谷溜池(元禄十年築造石碑流失)の堤防が決壊したもので、猿川下流域にあった二十数戸の民家を一瞬のうちに押し流したのであった。濁流に呑まれ

た人たちの捜索活動が流域の町村職員・消防団員・青年団員らによって行われ、遺体は旧東有田町や旧曲川村の水田で発見されたものもあり、橋梁に引っかかって発見されたり、遠くは旧大山村の山谷神社付近で発見されたものもあった。旧曲川村では蔵宿を中心に死者九名、行方不明二名、大山村では死者一名であった。

続いては昭和四十二年七月の水害で「四十二水」ある。

この水害はご存知の方が多いと思うが、昭和四十二年七月九日正午過ぎに有田地区は集中豪雨に見舞われ、有田ダム管理事務所では十一時から十四時までの間に百九十二ミリの雨量を記録した。町内の河川は、至る所で氾濫し、国道三十五号線も場所によっては水深一メートルの状態になった。午後に白川で山崩れが発生、十戸が土石流で倒壊や流出し、六名が死亡、一名が重傷を負った。同じく土石流で泉山で一名、岩谷川内で二名が死亡した。被害の概略は次の通りである。



昭和42年7月9日、有田伊万里地区を襲った大水害

死者九人、傷者三十七人、住宅全壊三十三戸、同半壊四十五戸、住宅流出三戸、床上浸水住家二百十二戸、床下浸水住家八百二十七戸、非住家被害二十八戸、橋梁流出・損害十四ヵ所、堤防決壊九十七ヵ所、旧西有田町では、蔵宿で金比羅さんの丘が崩れて一名が死亡、広瀬山では崩れた岩石の下敷きになり、さらに濁流に呑まれ二名が死亡した。

最後に、偶然にも昭和二十三年の水害では私の母の実家が猿川にあり、被災し流出？　昭和四十二年の水害は私が旧有田町役場に勤務した時に救助・救援に当たったことを付け加えます。

【参考資料・文献】
有田通史・通史編
西有田町史・下巻
やきものと渡り陶工・副島邦弘著
肥前陶磁史考・中島浩気著
有田町歴史民俗資料館報
佐賀県の災害歴史遺産・（佐賀県防災士会）

岩谷川内猿川渓谷から大谷溜池の途中にある供養塔　裏面に「昭和23年9月12日水害遭難者24名之霊」と刻まれている。

伝統的建造物保存地区の「洋館」

馬場　正明

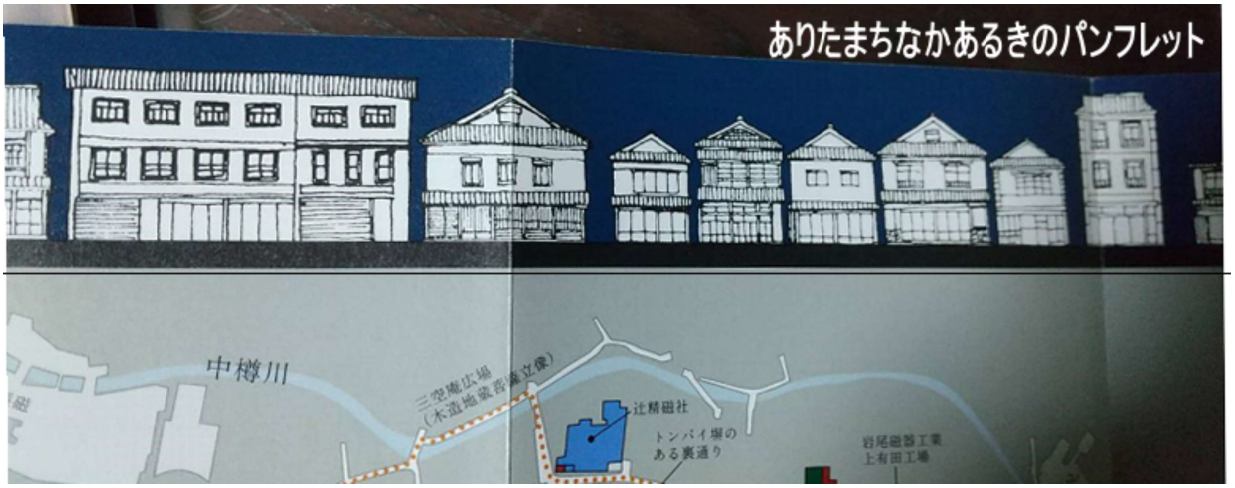
西洋館の勤務中に来館者に、「有田町はここ西洋館、向かいの深川製磁など洋風の建物が多いけどどれくらい」と問われ、洋風も含めるかなど色々考えたが、香蘭社、有田陶磁美術館の石倉など多くありますと答えた。

そのあと洋館について調べた。洋館とは江戸末期から明治、大正、昭和の戦前に建てられたもので欧米の影響を受けた外観や構造を持つ建物である。

欧米の影響を受けた外観とは、それぞれの部分で見ると屋根構造としては、寄棟屋根、陸屋根、片流れ屋根があり、壁の構造としては漆喰塗（和風の家でも使用）、モルタル塗（吹付け、洗い）、タイル貼り、下見板貼り、レンガ積み、石積みがあり、開口部の窓の形状は縦長で開口部の周囲には繰型（モールディング）ある。

このような見方で伝統的建造物保存地区の建物をみた。

香蘭社本社商品陳列館とそれに連なるゲストハウス



保存計画番号四五　大樽の有田町美術館の石倉、明治七年平林伊平が自邸の前面に陶器倉庫として木造で外壁を石積みの蔵としたもので、洋館といえる。なおこの石材は白川谷の長尾より採取したものである。（肥前陶磁史考）

保存計画番号六三　幸平の旧田代家西洋館は寄棟造り木造二階でアーチ窓ステンドグラスやベランダ、バルコニー、ベランダを支える柱列など典型的な洋風建築と云える。

保存計画番号六八　幸平の深川家には二棟の洋風建築が有る一棟は道からは見えないが明治十年の建築になる。外観は和風で擬洋風の「ゲストハウス」あるいは「異人館」と言われ、木造三階建て土蔵造りで、腰は海鼠壁とし屋根は寄棟造りで北側の正面にポーチ、内部には洋風の応接室があると言われている。

もう一棟はゲストハウスに鍵の手に連なり、通りに面して建つ商品陳列場、明治三八年の建築で、木造二階建て寄棟造りで南側正面には二階のバルコニー玄関や窓周りのモールデングがなされている。

保存計画番号五〇　旧田代家西洋館の向かいの深川製磁陳列場は、昭和九年竣工の木造三階建て寄棟造で外壁はスクラッチタイル、縦長窓の周りのモルデングは洋風の特徴を示している。

保存計画番号二六　上幸平の篠英陶磁器

保存計画番号四　泉山の石場入口交差点前の鶴田陶器（旧山水堂）

保存計画番号六四　幸平の銘品堂は昭和六～七年頃、当時の国道三十三号線が拡幅された時に新築になった。木造三階建て陸屋根外壁モルタル塗仕上げ、縦長の窓と窓廻りへの繰型など洋風を示す店部と伝統的町家の住宅部とが繋がっている

保存計画番号一三三・二　上幸平の篠英陶磁器の西隣に昔病院を営んでいた吉村家がある。旧病院は大正時代に建てられた木造二階建て寄棟屋根、外観はモルタル塗仕上げで一部タイル貼りして部分的に模様を表している洋風の建物である。

保存計画番号三二　上幸平のアリタポーセリンラボ（旧有田物産）は明治の伝統的町家の建物に連結して、昭和六年建てられた木造三階建て寄棟造縦長の窓と窓廻りへの繰型など洋風を示す。

泉山から幸平までの約一キロの道の片側に伝統的町家の間に三階建ての洋館がポツポツとあれば洋館が多いという印象があると思うけど、どうでしょう？

※保存計画番号は陶磁器製プレートに書かれた伝建物の番号

【参照】『有田内山伝統的建造物群保存対策調査報告書』有田町教育委員会（昭和六〇年）

文禄・慶長の役と倭城

中村　貞光

西山峰次氏が他界され、早いもので七年が経ちました。二〇一五年暮れに釜山を二人で訪れ、倭城の見学をしたことが昨日のことのように思い出されます。西山氏は当時から韓国語習得や倭城研究にとても熱心に取り組まれていました。機張の博物館では館長直々に二か所もの博物館を案内いただき、西山氏が韓国でいかに交友を深めておられたのかが良く解りました。

博物館では、朝鮮陶工たちが文禄・慶長の役で連行され渡来した当時の焼き物を鑑賞しましたが、九州陶磁文化館で見る初期の古伊万里とは違

釜山鎮支城（子城台）の石垣

い、絵付けが殆ど施されてない白磁の磁器が数多く展示されていて、絵付け（文様）は中国景徳鎮に源流をなすことが感じられました。

釜山では、当時の日本軍が築城した倭城を見学しました。歴史を遡ると、本能寺の変の後、日本の天下統一を果たした豊臣秀吉は、大明帝国征服という野望を掲げ「文禄・慶長の役」が始まり、一五九八年秀吉の死をもって日本軍が撤退して終結しますが、この時期に多くの朝鮮陶工が連行され、日本で初めてとなる磁器焼成の歴史が始まります。

朝鮮出兵の拠点となった呼子の名護屋城跡に建てられた名護屋城博物館では、当時の侵略戦争を「やきもの戦争」として語り継いでいます。

昨年十一月中旬、西山氏のご令嬢から「父が残した書籍を活用できないか？」との電話をもらい、自宅に伺い肥前磁器史考のほか数冊の書籍を頂きました。

書籍の中に、文禄・慶長の役と倭城関連の書籍があり、以前から興味を持っていたこともあり譲っていただきました。今回はこれらの中から文禄・慶長の役と倭城について記してみました。

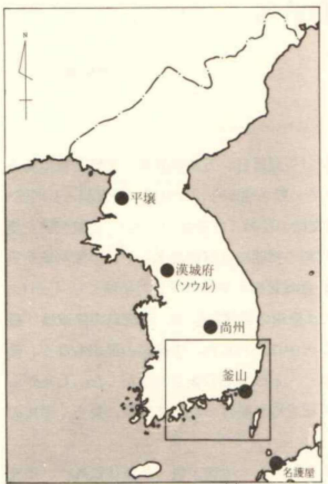
倭城とは、文禄・慶長の役における日本軍の築城遺跡だが、当時の朝鮮側の資料では、土塁、賊窟、賊塁などと称されている。（宣祖実録等）

一五九二年三月の豊臣秀吉の朱印状には「高麗之地、何之浦々へも一度に令著岸、陣取をかため、普請丈夫に可申付候。」とあり、当初から築城を念頭に入れていることが解っている。直後の同年四月十二日に第一陣となる小西行長・宗義智よしとしの隊が釜山浦に上陸、一夜にして釜山鎮を陥落させ、五月三日には漢城府（ソウル）に入り、六月十三日には平壌を占領している。

文禄・慶長の役で活躍した、韓国では「救国の英雄」とされる李 舜臣が「釜山城内官舎段、盡数撤去、築土造家、己成巣穴、多至百余戸、城外東西山麓、閭閻櫛比、連牆接屋、亦幾三百余家、皆是倭人自作之家、而其中大舎段、層階粉塵有若佛宇為白有臥乎所、原其所為、極為痛憤」と報告しており、釜山鎮城外に築地堀で囲まれ天守閣と思われる漆喰壁の仏殿の如き高層建築を持つ城郭が上陸から五ヵ月の内に出来ていた。

五月十六日付けで入明する際の秀吉のための御座所築城が指令され、補給路の確保が急務となり、釜山浦と平壌の間に一日行程に一城、都合十余の繋ぎの城が築かれ、釜山～漢城～平壌間での築城は朝鮮の邑城を改修したものと考えられている。

秀吉の御座所普請や進撃路の整備のほか、海上で李 舜臣の朝鮮水軍による再三の敗戦で、日本水軍の援護と補給基地確保のための港湾整備が急務となり慶尚南道沿岸部海域を中心に、全羅南道の一部と巨済島などへ倭城の築城が進んだと考えられ、朝鮮側の城では防御出来ないことが理由にあげられる。



川に隣接した山頂部に位置していること、構造は総石垣造り（天守・桝形虎口・横矢・折れ・仕切）で土造りが併用されており、瓦葺きの建物が存在し石垣や土塁を伴っている。朝鮮の瓦が使用されているが構造は日本式の築城である。

巨済島には永登浦城（文禄元年 島津義弘築城）、松真浦城（文禄元二年 福島正則築城）、長門浦城（文禄二年 蜂須賀家政築城）、倭城洞城（慶長二年に築城）の四つの倭城が築城されている。

巨済島　長門浦城　山腹曲輪群の石垣

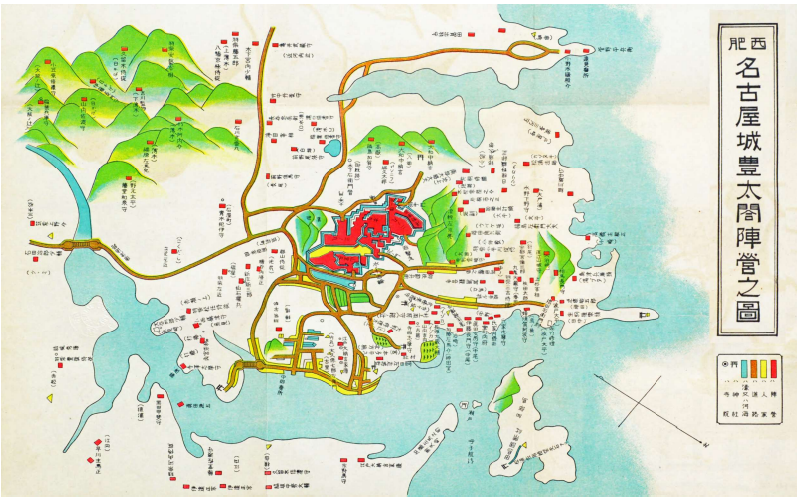
因みに、一二二六年には倭寇が慶尚道一帯に来襲し巨済島沿岸を掠奪したのちは、たびたび倭寇の侵犯が著しく、一三九二年高麗が滅びるまで巨済島は倭寇の基地のようになっていた。　宣祖（李氏朝鮮時代の第十四代国王）実録には、『土窟』と称されていた倭城が築地堀のみでなく、堀と石垣を持つことが記されていることから、日本式に改修されていたことがわかる。

このように、朝鮮半島の南部、韓国の慶尚南道周辺は日本軍の侵略拠点として倭城の築城が盛んであったことがわかるが、朝鮮半島南部に集中して築かれているのは、対馬海峡を取り込んだ国境線の確保にあったようだ。

また、国外での戦闘を行うことで備蓄する城詰米や武器庫など補給や管理面での問題もあり、倭城築城には日本国内の城郭と異なる部分がある。しかし、倭城の存続期間は最長でも七年間と短く、文禄・慶長の役のあと日本軍が撤退しそのまま凍結保存されている。

出兵の拠点となった名護屋城は大阪城に次ぐ規模を誇り、九州の諸大名を中心に割普請が行われ、約半年後に完成している。全国から百六十もの戦国武将が集まったまさに「天下人」の城で、周囲には現在百五十ヵ所余りの陣屋が確認されている。城下には二十万人を超える人々が集まり繁栄したが、一五九八年八月秀吉の死によって大陸侵攻は終り、その年の十二月に撤退が完了。

【参考資料】
豊臣秀吉の築城遺跡「倭城の研究」
城郭談話会発行



あとがき

今年は元旦から能登地震に見舞われ、自然災害とは言え被災地の方々には最悪のスタートになりました。連日の報道に心が痛みます。世界では相変わらずロシアとウクライナの侵略戦争が続きイスラエルのガザ攻撃も終息する兆しが見えません。

今年は気運も『昇竜の年』に因んで、何事も良い方に向かって欲しいものです。

さて、会報十一号は新聞作成用ソフト「**パーソナル編集長**」に切り替え、使いこなせるまで少々手間取りましたが、何とか発行することが出来ました。

年々頭も錆びつき老朽化は避けられませんが、もうしばらく皆様のご期待に沿うよう頑張ります！